

《藤井 理恵》氏

たましいの安らぎ～病院チャプレンのスピリチュアルケア～

たましいの痛み

私は病院で患者さんやそのご家族と関わりの中で、スピリチュアルケア、たましいのケアに携わらせていただいています。これまで 400 名近くの方々の最期を看取らせていただきました。誰もが社会やご家庭などで何らかの立場や役割を持っておられますが、その部分だけで生きているわけではなく、その部分を含めて人として生きているのです。

人生には喜びもありますが、同時に悲しみやたくさんの“なぜ”があります。「自分の人生ってこれでいいのだろうか」そのような生きる意味や価値について、自分の存在に関わるような問いをもつことがあります。このような問いは親しい誰かに対して答えを求めているわけではありません。それは人を越えた存在、自分を生かしている存在に対して問うているわけです。行き詰まったとき、神様…と心の中で叫ばれた方はきっと多いのではないかと思います。これはたましいからくるものであり、たましいの痛み、スピリチュアルペインだと言えます。

死を前にした方々の問い

なぜこのような痛みが生まれるのでしょうか。人は多くのときを「d o」の世界で、何かを行って生きています。「d o」によって受ける評価こそ価値があるという価値観にさらされているわけです。けれども「d o」の世界を失うと、「b e」の世界、つまりあるだけでしかなかった自分があらわになるわけです。

死を前にした患者さんのスピリチュアルペインは、発病から死に至るさまざまな過程でさまざまな問いかけとして発せられます。苦しみの意味への問い、命の意味への問い、価値への問い、孤独、限界、罪責感、死や死後の不安などが挙げられます。

発病した頃には、なぜ自分がこんな病気になったのかと問い、闘病や治療の時期には、生きる意味や病気に意味づけたいと言われます。自分の出来ることが限られてくると生きている意味があるのかとの問いが生まれてきます。

間近に迫る死を考えるようになってくると、まさに価値観の転換を迫られるという体験をされます。これまで積み上げてきたキャリアなども、死を前にして絶対的に自分を支えてくれるものにはなり得ません。私の人生は何だったのかという問いが生まれるのです。

誰にも理解されない孤独も大きな痛みとなります。さらには自分で自分自身を支えきれないという限界が訪れます。自分の力では自分に安らぎを与えることができない、そんな限界を感じた人が永遠なものや絶対的なものとの繋がりを求めるのがこの時期に多いように思います。

「b e」として沈黙を聴く

皆さんはこんな経験はないでしょうか。友人や知人のお見舞いに行った時に、その病状が思っていたより重症で、何も言えない。その時、何か気まずい沈黙が流れ、それを避けようと、「頑張ってるね」「きっとよくなるよ」などの適当な言葉を言うってしまうのは、私たちが何もできない自分、「d o」ができない自分の姿を見

ていられないからです。けれども、多くの患者さんは、必ずしもその沈黙を埋めてほしいとは思っておられないのです。「b e」としてそばにいたことがその人を支えることになるのだと、私も患者さんから教えられました。ありのままの「b e」を受けとめることが大切だと思われまます。

自己相対化と祈りについて

人生には予想外のことが生じます。それによってこれまで絶対的なものとしてとらえていた自分が相対化されること、これが起こってきます。自己が相対化されたときに生まれてくるのが、自分は生かされているという気づきと、自分を越えたものに向かう心、祈りです。

「全部自分の力でこなしてきたと思ってきたが、実は自分はちっぽけな存在だった」と語るのはホスピスに入院されていた 60 歳代の男性。「大きなものに包まれ、無になるというか…祈りのようなものの中に置かれ、もう自然に頭が下がります」との言葉を残し、負い切れない重荷を委ねる生き方へと変えられて微笑むような顔で逝かれました。

豊かに生き抜いた方々から教えられたこと

多発性骨髄腫を患う 60 歳代の男性の方がおられました。入院当初、「何もできない自分には生きる意味がない。死んだ方がいい」と言って治療を拒否していましたが、これまでの人生をお聴きしているうちに、彼の価値観に変化が見られるようになり、「病気もマイナスばかりじゃないかもしれない。進むしかないか」と言って、治療を始めました。「どんなに死にたいと思っても死ねないのは、自分を生かそうとする存在があるんじゃないか」と言われ、自分が生かされているということに感謝するようになり、その後、心に残る言葉をたくさん残してくださいました。「きっと人は、生きてやろうと思わなくても、生きている姿が、そのまま誰かの道になったり、光になったりするんですね」。「病気になって、弱さを知って、見えないものが見えるようになった。神にもたれかかって生きれば良いと思うようになった」。「生かされていることを知って、生きることの価値観が 180 度変わった。大きな達成感はなくとも、感謝して生きることが喜びだと思えるようになった」。最後まで感謝しながら人生を引き受ける彼の姿は、私たちに生きるということはどういうことかを教えてくださいました。

腎不全の 36 歳代の男性の患者さんがおられました。彼は「死んでも構わない」、「ここはキリスト教病院でしょ。神がいるなら、自分が透析を拒否しても助けるでしょ。それで神の存在を証明してもらいたい」などと言われ透析を拒否してました。それからしばらくして、「友達からもいろいろ言われて、自分は 1 人じゃないということにも気付いた」と彼は透析にやってきました。私は、「神様もあなたが最後まで生きることを願っておられる。生きられるのに必要なものはちゃんと用意されているはず。だから、生きることをやめないでほしい」と伝え、その後、一緒にお祈りするようになりました。闘病中の彼の心の中には絶えず生きることへの葛藤が渦巻いていました。身体症状も厳しく、その後 3 度の手術を受けなければなりません。けれども、手術の後に言われました、「これまでどんなに死にたいと思っても死ねなかったのは、きっと神様が、まだすることがあると言ってるんでしょうね」。これは、彼が初めて神様の視点で自分の人生を見る言葉を話してくださった時でした。そして、この後、とても心に残る言葉をおっしゃいました。「生きる意味があるから生きるんじゃない。生きていくことに意味があるんやと分かりました」と。そして、彼は、42 年の人生を生き抜かれました。

人は、自分が生きることにどんな意味があるのか分からないまま、それでも毎日を生きなければならないという現実に置かれます。けれども、たとえ分からなくても、その意味、答えはあるのだということだけを知って、与えられたいのちを生き抜いていくことが大切なのだと思います。

おわりに ～ たましいの安らぎ

私たちのいのちは与えられ、人は生かされている「b e」そのものです。生かされているということは、私たちが「d o」ではなく、「b e」として肯定されているということです。その絶対的肯定の前には、私たちの自己否定は通用しません。ですから、いろんな苦しみの意味が分からなくても、生きていけば知らされることがある。だから、その包み込みに委ねながら、与えられたいのちを生き抜くことが大切なのだと思っています。

私は、これまで出会った多くの方々から、たくさんのことを教えられてきました。存在そのものを揺るがす、たましいの痛み、スピリチュアルペインを抱える方々が病気や死を含めた人生を、「これが私の人生だ」と受けとめていく姿。また、残された人生をしっかり生きよう、生き直してみようという思いへ導かれていく様子。また、与えられた人生に感謝して逝かれる、その歩みの中に、「b e」としての安らぎ、たましいの安らぎがあるということをおぼわされています。

今日のお話が、これからの皆さんの人生や人との関わりにおいて、何かのお役に立てば大変うれしく思います。